

# 造形表現の指導力向上に繋げる保育者養成における 授業内容に関する一考察

## A Study of Class Content for Improving Instructional Skills in Artistic Expression in the Training of Childcare Professionals

石 上 洋 明

Yomei ISHIGAMI

学校教育研究ユニット

(令和5年9月29日受付, 令和5年12月22日受理)

幼稚園等では, 美術・造形の表現活動を行う機会が多い。しかしながら, 描画や造形などの表現の実践に対して自信を持ってない保育者も多い。先行研究において, 多くの学生が描くこと, 作ることに何らかの苦手意識を持つことが指摘されているが, 本研究での調査において, 苦手意識の原因は, 美術は上手く作らなければならない, 写實的に描かなければならないといった, 固定観念であることが明らかとなった。

本研究では, 保育者を目指す養成校の学生を対象として, 造形表現の指導力向上のために美術・造形表現に対する固定観念, 苦手意識の払拭を目指し, 授業内容の検討, 考察を行った。

### 1. はじめに

美術・造形などの表現活動は, 苦手意識を持ちやすい分野である。教員養成校においても, 美術教育を専門とする一部のコースに所属する学生を除くと, 美術・造形表現に関して, 苦手意識を持つ者も多い。また, 学生だけでなく, 一部の保育士・幼稚園教諭, 小学校の教員も描くこと, つくることの美術・造形表現に対して苦手意識を持っており, 日々の保育や教育, 指導への悩みへとつながっている。

筆者が担当した教員免許状更新講習, 保育関係者が集まる研修会で確認したところ, 参加者の6〜7割程度が, 描く, つくるといった表現に対して, 苦手意識を持っていた。

多くの小学校では学級担任制として, 担任が図画工作の授業を担当し, 幼稚園, 保育所, 認定こども園等では, 子どもたちは日常的に描く, つくるなどの造形活動を行っている。幼児・児童にとって美術・造形表現は身近な活動の一つであ

り, 教育においても重要な要素とも言える。

教師や保育者が美術・造形表現に対してあまり良い感情を持って接していなかった場合, 子どもにも悪い影響を及ぼす可能性もあるだろう。美術・造形表現に関して苦手意識を理由として, 教材研究を避けてしまい, 誤った評価, 誤った指導を行ってしまうことも懸念される。

表現の面白さ, 豊かな表現を, 子どもたちに伝えることのできない状況となってはならない。美術・造形表現の指導法に対する理解が乏しい教師, 保育者が, 子どもの美術・造形表現への苦手意識を生み出し, やがて成長した子どもが次世代を育て, 同様の苦手意識を再現してしまう。そのような負の連鎖を断ち切ることが, 本研究についての課題である。

本稿では, 教師や保育者をめざす学生を対象とし, 美術・造形表現への苦手意識を払拭し, 表現を楽しむことのできる授業内容の検証, 考察を目的とする。

## 2. 美術・造形に対する苦手意識に関する調査

美術に対して苦手意識を持つ教師及び、教員養成校の学生の問題は、1980年代末の煤孫<sup>1</sup>の研究で、すでに言及されている。そこから35年ほど経過した今もなお、当時と変わらない問題が継続している。

実際に、将来教員を目指す学生たちが持つ、美術・造形表現に対する意識はどのようなものだろうか。状況を把握するために、2021年度、2022年度の授業で、描くこと、つくることの、美術表現に関する印象についてのアンケートを実施した。

アンケートは、福岡教育大学教育学部初等教育教員養成課程の学生を対象とした。筆者が関わる授業、「幼児教育の今日的課題」で、オンラインでのアンケートフォームへの回答をお願いした。アンケートは無記名とし、個人情報は一切収集しない。なお、アンケート実施に際して、研究においてアンケート結果を利用することを周知している。

回答者は、主に1, 2年生の学生である。回答は2021年度117名、2022年度111名、計228名であった。

質問内容は次の通りである。

【質問1】「美術」は好きですか

【質問2】美術的な表現（描くこと・作ること）は得意ですか

【質問3】「質問2」の回答について、理由を教えてください。

【質問1】の結果は、「好き」34.6%、「まあまあ好き」41.2%、「あまり好きではない」22.8%、「嫌い」1.3%であった。

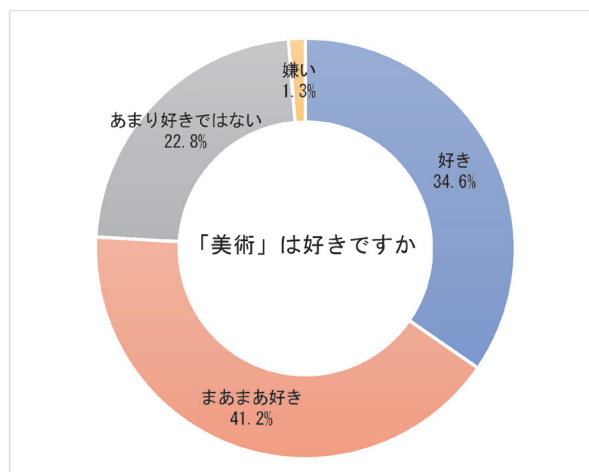


図1 【質問1】「美術」は好きですか

好き」41.2%、「あまり好きではない」22.8%、「嫌い」1.3%であった。「好き」「まあまあ好き」の美術に対してポジティブな印象を持っている回答は75.9%と多数を占めていた。(図1)

【質問2】の結果は、「得意」4.8%、「少し自信がある」22.8%、「あまり得意ではない」53.5%、「苦手」18.9%であった。美術表現が得意か否かの質問では、「あまり得意ではない」「苦手」のネガティブな回答が72.4%となり、【質問1】の回答と結果が逆転している。

降旗<sup>2</sup>による図画工作・美術への苦手意識の調査では、何らかの苦手意識を持つ大学生は60%となっており、今回の調査結果と近い結果であったため、他の教員養成校でも同様の課題を抱えていることは明らかである。(図2)

【質問3】については自由記述式としている。美術表現が得意だと感じる学生、苦手だと感じる学生、それぞれ自身の言葉で、美術が得意か否かの理由について述べてもらっている。「あまり得意ではない」「苦手」の苦手意識を持つ学生の回答内容を要約、キーワードを抽出すると、次のように分類された。

- ①イメージ通りにできないから 36.4%
- ②手本・指導通りにできないから 15.2%
- ③才能・センスが無いと思うから 33.3%
- ④人と比較して劣ると感じるから 9.1%
- ⑤下手と言われたことがあるから 3.6%
- ⑥美術・図画工作の成績が悪かったから 2.4%

「①イメージ通りにできないから」が36.4%で最も多く、次いで「③才能・センスが無いと思う

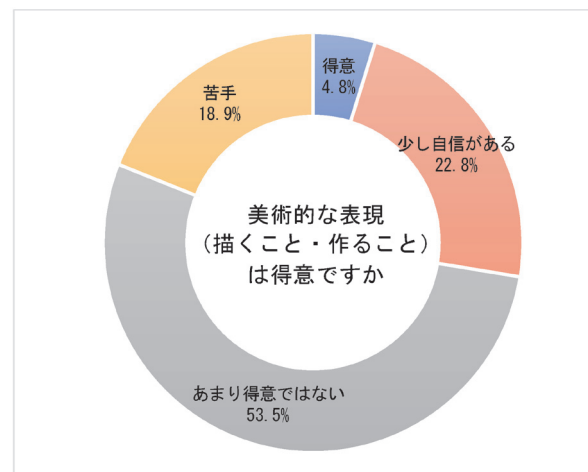


図2 【質問2】美術的な表現（描くこと・作ること）は得意ですか

から」33.3%と多かった。

①に分類された回答で多く見られた内容は、頭の中でイメージした作品が、実際に制作してみると全く違う作品になっている。写実性を求めて制作したが、できた作品は歪んでしまっているといった内容が多かった。

③に分類された回答では、自身が不器用である。絵心がない。美術的なセンスが無いといった、諦めとも取れる回答が多かった。

6項目に分類された苦手意識の要因を探るキーワードは、さらに「自己による評価」①～④、「他者からの評価」⑤・⑥に大別される。94%が「自己による評価」であり、苦手意識を持つ学生の自己評価の低さ、自己肯定感の低さが顕著に表れている。

自己評価、自己肯定感の低さには、写實的で高い技術を要するといった、美術・造形表現に対する誤った認識や固定観念に囚われてしまっていることが、学生の回答を細かく読み解くことで明らかとなった。

【質問1】と【質問2】の関連について見ていく。【質問2】で「得意」または「少し自信がある」を選択した回答者は、「あまり好きではない」、「嫌い」と回答をしておらず、美術に対してネガティブな印象は持っていない。

表現することが「苦手」、「あまり得意ではない」かつ、美術が「嫌い」、「あまり好きではない」の選択者は全体の4分の1ほどであった。

「好き」、「まあまあ好き」と、美術に対してポジティブな印象を抱きつつも、「あまり得意ではない」、「苦手」を選択した回答者が全体の半数ほどを占めている。これらの回答者は、美術に対する固定観念を払拭することができれば、苦手意識を改善することができるのではないだろうか。(表1)

	好き 4	3	2	嫌い 1	合計
得意 4	4.8%	0.0%	0.0%	0.0%	4.8%
3	15.8%	7.0%	0.0%	0.0%	22.8%
2	12.7%	29.4%	11.4%	0.0%	53.5%
苦手 1	1.3%	4.8%	11.4%	1.3%	18.9%
合計	34.6%	41.2%	22.8%	1.3%	100.0%

表1 美術への意識【質問1】【質問2】の関連関係

美術が「嫌い」、「あまり好きではない」と、ネガティブな印象を持っている回答者は、何を理由として苦手意識を持っているのだろうか。(図3)では、6つに分類した項目の、「好き」「まあまあ好き」「あまり好きではない」「嫌い」の分布を示している。

「あまり好きではない」を選択した学生が最も多く回答したのは、「③才能・センスが無いと思うから」である。ほぼ同じ割合で「①イメージ通りにできないから」も多い。美術を「嫌い」と思う学生は「②手本・指導通りにできないから」、「③才能・センスが無いと思うから」、「④人と比較して劣ると感じるから」に分布している。

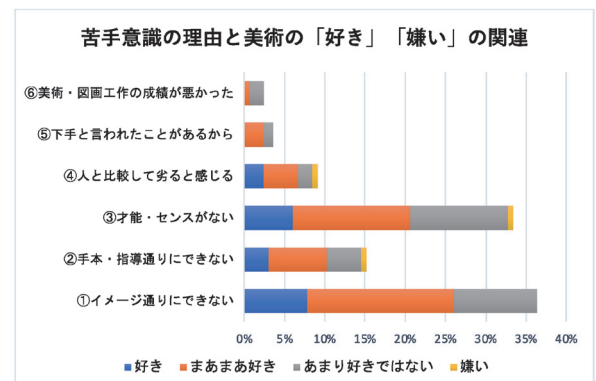


図3 苦手意識の理由と「好き」「嫌い」の関連

美術に対してネガティブな感情を持っている学生は、自身の表現技術に対して、漠然とした不安を感じている傾向であった。苦手だと感じる理由の中で頻出する表現として、「リアル」や「写実」という言葉が見られた。また、ほぼ全ての回答は描く表現に関するものが多く、苦手意識を感じている学生も、立体作品の制作、工作、アクセサリなどの用途性のある作品の制作については、好んで取り組んでいることも明らかとなった。

### 3. 実践に向けての考察

美術・造形表現に対し、学生が抱える課題を明らかにすることで、苦手意識の克服や緩和につながる糸口を見出すことができるだろう。苦手意識の要因は、発達によるものと教育によるものが複合的に影響しているものと考えられる。美術・造形の指導について正しく理解し、指導力の向上を図るためには、苦手意識に繋がる、美術に対する固定観念を払拭することが必要である。

苦手意識を感じている学生の多くが、描画表現

に関する内容に忌避感を持っている。また、写実性にこだわる傾向にあり、美術＝写実性というイメージに囚われている。美術＝写実性のイメージについては、子どもの絵の発達とも関連づけることができる。西川<sup>3</sup>は子どもの絵の発達の傾向として、8歳から11歳ごろに「写実の黎明期」、11歳から14歳ごろに「写實的」と示している。また、煤孫<sup>4</sup>の論文では、美術が好き・嫌いになった時期が示されており、9歳から13歳の時期に、美術が嫌いになったと感じる学生が多くなることが明らかになっている。

幼児期から学童期の移行の時期は、知的リアリズムから視覚的リアリズムに移行する時期とされ、発達段階としてリアルさ、写実性を求めようとするのが一般的である。美術＝写実性のイメージを固着させないために、幼児期の表現の教育は慎重に進めなければならない。

美術・造形表現に苦手意識を持つ学生は、総じて自身の表現に対しての自己評価が低い。幼児は、素朴ながらも、自由にのびのびと自己を発揮した表現をしている。絵を描く、何かを作るといった遊びを通して何か新しい発見をし、ときに欲求を発散している。苦手意識に繋がる要因として、教師を含めた周囲の大人の関わりも挙げられる。教育のあり方によっては、子どもが本来持っている多様な価値観を奪うことにもつながり得るだろう。レッジョ・エミリア・アプローチの礎を築いたローリス・マラグッツィ(Loris Malaguzzi)による詩「100の言葉(100 linguaggi)<sup>5</sup>」では、大人たちの価値観が、子どもがもともと持っている表現の多くを奪ってしまうことを示唆している。

苦手意識を持つ、多くの学生が記入した、いわゆる「才能」や「センス」は、生まれ持ったものではなく、繰り返し修練することで身に付くものである。美術が好きな学生は、幼い頃から描くこと、つくることに親しみ、繰り返し遊んできたことによって、自然と修練が積まれた結果だといえる。苦手意識を持つきっかけは、繰り返し遊び込む体験が、何らかのきっかけで途切れてしまったことによるものであると推察される。

多くの学生たちは、苦手意識も相まって、上手、下手といった価値観に囚われて、表現することに楽しさを感じることができていない。美術は上手くなければならないという、固定観念が邪魔をしている。

造形表現の指導力向上に繋げる授業内容を検討するにあたっては、美術・造形表現の評価のあり

方を伝える必要がある。また、教師・保育者自身が表現を楽しむ術を身につけることも重要であろう。特に表現の領域では、子どもの主体性を存分に発揮できる教育を検討しなければならない。教師・保育者が楽しむ姿は、次第に子どもにも伝わり、子どもたちは自然と主体的に描くこと・作ることを楽しむだろう。

#### 4. 実践

筆者が担当する、福岡教育大学で開講している授業、「美術表現の指導法」を利用し、本研究における実践を行なった。実践に際し、本授業の成果を研究に活用することを学生に周知し、同意を得ている。なお、個人情報保護の観点から、本稿では個人名が特定されないよう配慮し、一部データの修正を行った上で利用している。

##### (1) 授業実践

「美術表現の指導法」では、2019年度より美術・造形に対する苦手意識の緩和を目的とした実践を行っている。コロナ禍による授業でも、状況に応じて適正化した内容を実施している。2021年度からは調査で得た結果に留意し、授業内での「美術」の捉え方、「評価」の方法について、授業導入時に講義を行った上で制作に取りかかるようにした。

本授業では、自分が好きなものを、好きなように表現する活動を経験することによって、つくることへの心理的な障壁を少しでも軽減することを試みる。

授業の展開は次の通りである。(表2)

絵本をテーマとした立体作品制作

次	授業内容	表現方法	配当時間
1	導入 題材となる絵本探し		1時間
2	素材探し イメージスケッチ 設計図作り	描画 デザイン	2時間
3	制作	立体造形	6時間
4	作品集原稿作成 動画撮影	デザイン 映像	1時間
5	振り返り		1時間

表2 「美術表現の指導法」授業展開



美術・造形に対する苦手意識に関する調査では、「つくりたいものがわからない」という回答も見られた。テーマが自由すぎることも、元々苦手意識を持ってしまっている学生にとっては困難が生じてしまう。本授業を受講する学生にとって親しみやすいモチーフとして、絵本の一場面の立体化を授業の主題として設定している。絵本をテーマとした作品であること以外には、特に条件は求めず自由に表現することとした。制作を楽しむことを念頭に、自分なりの表現方法を選択できるよう、テーマ以外は自由としている。

本授業は、スキルの向上を目的としていない。表現することを楽しむ中で、表現の多様性に触れ、表現への意欲を高めることを目的としている。

作品制作のため、自ら考え工夫する姿勢を評価する。「～～したい」という意欲を持って、主体的かつ積極的に授業に臨む意欲を引き出せるよう留意した。

参考とする絵本に似ていることや、表現技術の高さを観点とした評価は行わない。作品を完成させることが目的ではなく、制作するプロセスを楽しむことを重視する、「造形遊び」として授業を展開する。長い期間かけて制作するため、これまで受講した学生全てが作品を完成させることが出来たが、授業の導入の際に「完成を求める課題ではない」ことを伝えている。

本授業の一連の行程を経て、描画、デザイン、立体造形、映像での表現を体験できるよう課題を配置している。第4次の作品集原稿作成と、動画撮影を除くと、全て自身のために表現することとなる。

第1次は、導入として、本授業での美術表現への考え方、制作工程を、スライドを用いて説明する。また、参考として過去の作品の画像も提示する。授業への導入終了後、作りたい作品の題材となる絵本を、個々に探してもらう活動を行う。

第2次では、自身が作りたいと思う作品をイメージし、必要な材料、制作の計画を把握するための描画とデザインを行う。素材は廃材や自然物を含め、できるだけ多くの種類を準備する。素材の収集、リサーチを学生自身が行うことで、より主体的に制作に携わることをねらった。

第3次では、イメージイラストや設計図を基に、それぞれ個別に相談しながら制作を進める。学生のアイデアに応じた素材、制作方法を協議しながら選択する。制作に躓くことがあれば、指導者や、周囲の学生と相談しながらアイデアを煮詰

め、再検討する。周囲とのコミュニケーションも必要な要素であるため、時間は十分に確保する必要がある。

第4次は、他者に向けての表現である。自身が制作した作品を、写真、文章、動画で発表する。コロナ禍以前は教室を美術館に見立てて展示を行っていたが、コロナ禍より、通常通りの授業が困難であったため、作品集の作成、ビデオを用いたオンライン鑑賞会を行うこととした。作品集の作成、ビデオの作成、双方とも表現の一環として捉え、学生それぞれの個性を発揮してもらった。

第5次は、本授業全体の総括として、第4次で制作した作品集、ビデオを視聴する。作品集、ビデオの視聴を通しての感想を、文章として表現することで総括とした。

制作時、特に多くの学生が選択した素材は、軽量粘土、フェルト、ベニヤ板であった。軽量粘土は、乾燥すると固まるため可塑性が高く、作業性が良い。絵の具を混ぜたり、他の色付き粘土を混ぜたりと、発色も良かったため、学生の人気も高かった。目標とする色ができるまで、様々な手立てで色を混ぜながら苦心する姿もあったが、色作り自体を楽しむ様子も見られた。

軽量粘土はよほど大きな作品でない限り、自重で潰れないことも特徴である。骨組みを入れる必要がないため、作りながら形を調整することも可能である。綿密な計画のもと制作する必要も無く、気軽に扱えることも魅力の一つであろう。

フェルトも多くの学生が選択した素材である。発色も良く、手触りも良い。素材の温かな雰囲気は、絵本のシーンを再現する際にも都合が良く、作品のメインとなる場所や、アクセントとして多くの学生が活用していた。切る、縫う、貼る、様々な方法で作品に取り入れていた。

ベニヤ板もまた作品に取り入れる学生が多かった。今回用意した素材では、加工のしにくい部類となるが、柔らかい素材が多い中で、作品の形状をしっかりと保持する目的で、土台や背景に使う学生が多かった。加工にはノコギリやドリルなどを使うが、学生のスキルに応じて筆者が手を貸した。

## (2) 様々な表現

6回の制作期間を終え、自分のための表現から、他者に向けての表現に移行する、第4次に展開する。作品集(図4)、作品ビデオの作成では、自分の作品の、一番見て欲しい姿、工夫したポイントを、写真と動画で撮影する。写真、動画の撮影

では、自身の作品の魅力を最大限に表現できるよう、教室の一部を使ったり、屋外に持ち出して自然の中で撮影したりと工夫する姿が見られた。



図4 授業成果「作品集」

作品は、どれも個性豊かで、原作の絵本に対する愛情が溢れているものばかりであった。絵本を読んで感じた面白さを、立体として表現した際にも同様に再現しようと、素材を駆使して試行錯誤した様子が見られる。作品は、飾るだけでなく、動かせる仕掛けを作ったもの、部品を交換することで、別のシーンに切り替えることができるものなど、学生それぞれの工夫が光っている。

授業を始めたばかりの頃は、若干の苦手意識を感じる学生も見られたが、作品を作り終え、作品集やビデオを作成する段階では、いきいきと、そして堂々と表現に取り組んでいた。学生によってはタブレットを使って、描画や、設計図作成を行うなど、普段の授業では見ることのできない、学生の新たな一面を垣間見ることができた。

次に、2023年度の学生作品の一部を紹介する。



図5 学生作品1 (学生撮影)



図6 学生作品2 (学生撮影)



図7 学生作品3 (学生撮影)



図8 学生作品4 (学生撮影)



#### 学生作品 1：

「スイミー（レオ・レオニ 作）」をテーマとして制作した作品である。醤油などを入れる、魚型の「タレビン」を使って制作している。統一された規格の容器を使うことで、魚の「群れ」が面白く表現されている。統一されたかたち、色の中で、一匹だけいる黒い魚が際立ち、絵本の世界観を表現している。容器の表面に色を塗るのではなく、中に絵の具を封入することも、質感のムラを無くし、作品の統一感につながっている。（図5）

#### 学生作品 2：

「の（Junaida 作）」を参考に制作した作品である。花びらは毛糸を巻き、接着剤で固めて制作している。毛糸がぐるぐると巻かれてできた独特の紋様は、作品の中で特に際立ち、作品をより華やかなものになっている。粘土、毛糸、フェルトなど、様々な質感の素材を組み合わせることで、複雑で面白い作品となっている。（図6）

#### 学生作品 3：

「てがみをください（山下 明生 作・むらかみ つとむ 絵）」より制作した作品である。それぞれの場所に、イメージに合わせた素材を選択している。少し歪んだかたちのポストが、かえって味わいとなって、この作品の世界観の表現に彩りを添えている。屋外の背景に作品が溶け込み、周囲の自然物も作品の一部として取り入れることができる。（図7）

#### 学生作品 4：

「たまごにいちちゃん（あきやま ただし 作）」を基に制作された作品である。「たまごにいちちゃん」には、内部に強力な磁石が仕込んであり、自由に移動させて遊ぶことができる。ところどころに配置された石は実際の石であり、本物の石ならではの質感を実現している。一方で草むらは、弁当で使うバランを使っており、人工物が持つ独特の色味、素材感が作品の印象をポップにしている。（図8）

学生が制作した多くの作品は、自然物や市販品そのものの形を効果的に取り入れている。また、折紙など、これまでの経験で学んだことを制作に活かした作品も見られた。技術や、いわゆる「センス」に自信が無くとも、ここに至るまでの学習や生活で得た知識・経験を、作品の中にこめることができたのではないかと思われる。

全く何もないところから作品を作り出そうとすると、躓くことも多くあるだろうが、いくつかのきっかけを提供するだけで、学生たちは自ら考え、作品に自身の思いを込めた表現ができたのではないだろうか。

これらの経験が、今後学校や幼稚園、保育所等に勤務した際の、幼児・児童に対する指導へのモチベーションにつながっていくものと考ええる。

#### 5. 授業成果の考察

授業の成果を、授業最終回の振り返りの際に記入してもらった感想をもとに考察する。

##### 【2022 年度】

- この授業を通して、改めて制作することの楽しさを実感し、これからも、「楽しむ」ことを忘れず、作品づくりを行いたいと思いました。
- この授業を通して、皆が表現を楽しんだということが感じられ、改めて、表現は楽しむことが大切であるということを理解することができました。
- もっと細部にこだわりたいという気持ちも生まれました。その「もっと〇〇したい」という気持ちを感じることが、表現を楽しむうえで重要なことであると思うので、他者の表現を味わいながら、自分なりの作品をつくっていくことをこれからも大切にしていきたいです。
- この作品作りで美術表現をすることの楽しさやみんなの作品を見る面白さを学ぶことができました。この経験を子どもたちにも体験してほしいと思います。実習では、子どもの表現を認めたり褒めたりして自分を表現することの楽しさを感じてもらえるように向き合っていきたいです。
- これまでの授業を通して、制作の楽しさを感じることができました。絵本のテーマを立体にすることにより、表現する場面や素材選びなどが難しいこともあり、なかなか作業が進まないこともありました。しかし、作品が完成すると自分の思い通りになった喜びや達成感を味わうことができました。また、最初に計画していたものが思い通りにできない点も

ありましたが、作品が完成するにつれて愛着が湧き、それも含めて自分の作品の良い点だと考えられるようになりました。

### 【2023 年度】

- 自分の作品においても取り組みや工夫点、改善点など改めて考えることができ、とてもいい機会でした。この授業を通して、楽しく美術表現に取り組むことができ、とても楽しかったです。
- 私はこの活動を通して、作品作りに対する苦手意識が無くなった気がしています。絵本探しから始まったことで、自分が作りたいものを作ることが出来たし、絵本の中を表現するという制限があったことで、自由過ぎず、丁寧に表現しようと取り組みました。
- 平面を立体にすると、その場面の良さがより分かるようになりました。例えば、質感や色味、動きです。(中略) 夢中になって制作するという楽しさを実感することができました。やらされるのではなく、計画を立てて自分の作品を主体的に作るときの切実さや達成感は他で味わうことができません。
- 自分も生徒がやりたいことをできるかぎり叶えてあげられるような知識や技術を身につけたいと思ったし、先生に聞いたら大丈夫だという安心感を与えられるようになりたいと思いました。
- こんなにも色々な表現方法があるのだと感じました。例えば、醤油の入れ物を使ったり、糸を使ったりと自分では思い浮かばなかったような表現の仕方に触れました。もし、子どもたちにこのような活動をさせたとしても、同じように保育者が思い浮かばなかったような表現方法をする子もいると思います。その際には、「みんなとは違うからダメ」ではなく、その子の個性を認め、自由に表現していることを受け止めるべきだと感じました。
- 友達にアドバイスを貰ったりしながら作成できて、とても楽しかったし完成した自分の作品を見てとても可愛いなと思えます。
- 私は図工や美術で作ったものを家に持って

帰った際に、親に「あんたこんなの作れんの？これ本当にあんたが作ったの？」と驚かれることが多かったので、学校の中では苦手だなと思っていたも、家だと誇らしい気持ちになっていました。なので学校内でも、子どもと先生が1対1になった場面に限りこのような反応をしてみると、子どもによっては表現をすることを楽しむきっかけになるのではないかと、思いました。

- 何かを作るとなると、自分の力量を気にしたり、評価を気にしたり等、自分の自信の無さに繋がって、どうしても苦手意識を持っていましたが、自分の好きな絵本を選べたり、自分で好きな素材を決めて作れたりといった自由に表現できることによって、上手下手に振り回されることなく、人の評価を気にすることなく、気楽に活動することができました。
- 全体を通してまず作ってみることの大切さを学びました。作っているうちにどんどんアイデアが出てきて楽しくなってきて、より良い作品が作られていくことに気づくことができました。

学生の感想からは、制作を楽しむことの重要性、自身が楽しんだという充実感を見ることが出来る。当初は苦手意識を感じながらも、思考を巡らせながら作品と向き合う中で、作ることの面白さを見出し、やがて完成した作品に対して愛着を感じる学生もいた。

授業では、制作方法を相談し合ったり、感想を言い合ったりしながら制作を進める姿が多く見られた。また、作品集やビデオの視聴を通じて、作品制作時には気づくことの出来なかった、一人ひとりの制作の意図や工夫を知り、次の作品制作への意欲の高まりへと繋がっていた。

他者の多様な考え方に触れることで、発想、アイデアが湧き上がる感覚にも気づくことができたと思われる。制作時の学生の姿、完成した作品や作品集、振り返りの感想、それぞれから判断すると、本授業のねらいは達成できたものと思われる。

指導力の向上のためには、美術・造形の評価に対する正しい認識と、子どもの多様な表現力、何より教師・保育者自身が描くこと、作ることを楽しむ心が必要だろう。



## 6. おわりに

美術や表現の面白さは多様性に富むことにあ  
る。幼児期子どもたちは自分のアイデアを自由  
に表現し、創造的な活動を通じて問題解決能力を  
養うことができるだろう。美術・造形表現は、子  
どもたちが自分のアイデンティティを見つけ、自  
己肯定感を高める場でもある。

実習生や、経験の浅い教員は、どうしても「教  
える」ことに意識が向きすぎるあまり、子どもが  
本来持っている力を軽視してしまうことも度々見  
られる。美術・造形等の表現は、子どもが自己表  
現や創造性を発揮し、感性やコミュニケーション  
能力を発展させるための多彩な活動を包括してい  
る。教師・保育者は、子どもが自分自身を表現  
し、学び、成長できるよう援助することのできる  
資質・能力が求められる。

本研究の成果は、学生が絵本対し、愛情を持っ  
て接しているからこそ、導き出されたものと思わ  
れる。学生が受講した、他の授業での経験が本授  
業でも活かしているのだろう。学生の指導力向上、  
キャリア形成には、美術・造形表現のみを集中的  
に考えるのではなく、環境・生活・文化を関連づ  
けながら考え、結びつけていくことのできる授業  
内容を検討していくことが必要だろう。

## 謝辞

本研究での調査、実践において、「幼児教育の  
今日的課題」2021年度、2022年度受講生の皆様、  
「美術表現の指導法」2022年度、2023年度受講生  
の皆様にご協力いただいた。ここに謝意を表しま  
す。

## 註

- <sup>1</sup> 煤孫康二 (1988). 美術が苦手な小学校の先生  
をなくそう：理解する訓練と手の訓練を通じ  
て. 教育工学研究 (10), 岩手大学教育学部  
附属教育工学センター pp.31-41.
- <sup>2</sup> 降籙孝 (2016). 図画工作・美術への「苦手意  
識」解消の試みと成果：目指すべき造形美  
術教育を実現させるために. 山形大学紀要.  
教育科学 = BULLETIN OF YAMAGATA  
UNIVERSITY. EDUCATIONAL SCIENCE,  
16(3), pp.21-191.
- <sup>3</sup> 西川晶子 (2018). 幼児の描画発達縦断的検討  
(M児3歳から5歳)：象徴期から写実の黎  
明期への移行を幼稚園時の描画の縦断的デー  
タから考察する. 信州豊南短期大学紀要,  
(35), pp.251-268.
- <sup>4</sup> 前掲. 煤孫康二 (1988)
- <sup>5</sup> REGGIO EMILIA APPROACH. 100 linguaggi.  
[https://www.reggiochildren.it/reggio-emilia-  
approach/100-linguaggi/](https://www.reggiochildren.it/reggio-emilia-approach/100-linguaggi/) (参照9月26日)

